

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、11 月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（11 月）

令和 5 年 10 月 31 日
愛 媛 県

1 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報（令和 5 年 10 月 26 日発表）の解説
向こう 1 か月の天候の見通し 四国地方（10 月 28 日～11 月 27 日）

< 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 >

	平均気温（1 か月）	降水量（1 か月）	日照時間（1 か月）
四国地方	低 10 並 30 高 60 % 高い見込み	少 40 並 40 多 20 % 平年並か少ない見込み	少 20 並 40 多 40 % 平年並か多い見込み

< 予報のポイント >

寒気の影響が弱く、暖かい空気が流れ込む時期があるため、向こう 1 か月の気温は高いでしょう。特に期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。

高気圧に覆われやすいため、向こう 1 か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いでしょう。

2 病害虫の発生予想

かんきつ

(1) 貯蔵病害（緑かび病・青かび病）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 果実品質は、平年に比べクエン酸がやや高い傾向である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 収穫作業は降雨直後を避け、収穫・選別作業時に果皮に生傷や当たり傷を付けないよう丁寧に取扱う。

(イ) 貯蔵中の温湿度管理や入庫量を適正に行い、腐敗果は発見次第、速やかに除去する。

(ウ) 収穫 1～2 週間前までの薬剤散布を徹底する。なお、散布後 100mm の降雨があった場合には追加散布する。

(2) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 10 月中旬の定点調査では、寄生葉率、1 葉当たり雌成虫数ともに平年並である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 気温が低くなると薬剤の防除効果が上がりにくいので、発生園では早めに防除する。

(イ) 果実袋やサンテなどによる被覆は、ハダニ類の発生の有無を確認し、防除後に実施する。

野菜

(1) 黄化えそ病（冬春きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 10 月中旬の定点調査では、発生を確認していない。

(イ) 媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生は少である。

(ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、媒介虫の発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。

(イ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が悪くなるので、発生圃場では発生に応じて2～3回防除を行う。

(ウ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

(エ) ハウス外部からアザミウマ類の侵入を防止するため、防虫ネットや紫外線除去フィルムなど物理的防除を積極的に行う。

(2) 褐斑病 (冬春きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

(ア) 10月中旬の定点調査では、発生を確認していない。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 換気を十分に行い、多湿を防ぐ。

(イ) 草勢低下、窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(ウ) 老化葉や発病葉は早めに除去し、適切に処分する。

(エ) 発病初期の防除に重点を置き、葉裏まで薬液がかかるよう丁寧に散布する。

(3) うどんこ病 (冬春きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 10月中旬の定点調査では、抑制栽培きゅうりでは平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 葉裏、葉柄まで菌叢が広がると薬剤防除が困難となるため、病勢が進展した発病葉は可能な限り除去し、適切に処分する。

(イ) 窒素過多を避ける。

(ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(4) 炭疽病 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 10月中旬の定点調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 育苗床で発病が見られていた場合、定植後に外観上健全な株であっても保菌している可能性があるため発病に十分注意する。

(イ) 萎凋・枯死株は直ちに除去し、補植用苗を定植する。

(5) うどんこ病 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 10月中旬の定点調査では、やや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病葉や古葉はできる限り除去し、伝染源の除去、通風の確保と薬剤の付着性を高める。

(イ) 気温の低下とともに新しい展開葉(発病初期は展開葉1～2枚目をよく観察する)から発病し始めるため、葉裏をよく観察し、発病初期の防除に重点を置く。特に、育苗期に多発した圃場では注意する。

(ウ) 薬液が葉裏や芽の間隙部にかかるよう丁寧に散布する。

(6) コナジラミ類 (冬春トマト)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 10月中旬の定点調査では、タバココナジラミ、オンシツコナジラミともに平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 定期的な薬剤防除を行い、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (イ) 薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (ウ) 本虫は、多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を徹底する。
- (エ) コナジラミ類のハウス内への侵入を防ぐため、ハウス開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下が望ましい）を被覆する。また、紫外線除去フィルムを組み合わせるとさらに効果的である。
- (オ) タバココナジラミが媒介するトマト黄化葉巻病の発病株は、発見次第速やかに抜き取り、適切に処分する。

(7) ハダニ類（冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 10月中旬の定点調査では、発生は平年並の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。
- (イ) 薬剤は、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (ウ) 薬剤の選択に当たっては、ミツバチや天敵カブリダニ類等への影響を考慮する。
- (エ) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤の連用を避け、気門封鎖剤を含め、系統の異なる薬剤によるローテーション使用を心掛ける。また、薬剤散布後は防除効果の確認を行う。

(8) アブラムシ類（冬春トマト、冬春きゅうり、冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 10月中旬の定点調査では、冬春トマトで平年並、冬春いちごで少、抑制栽培きゅうりでは発生を確認していない。
- (イ) 黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺数は、平年並で推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。
- (ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。
- (イ) マルハナバチやミツバチ、天敵類を使用している施設では、天敵類への影響を考慮し、薬剤を選択する

(9) ハスモンヨトウ（冬春野菜全般）

（令和5年10月18日付 病害虫防除技術情報（第4号）参照）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 10月中旬の定点調査では、冬春いちごで平年並の発生である。
- (イ) 性フェロモントラップによる誘殺数は10月上旬に7地点のうち3地点で平年より多かったが、中旬以降並からやや少なく推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、発生に助長的であるが、今後気温の低下にともない露地での発生は減少してくる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により幼虫や被害の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(10) オオタバコガ（冬春野菜全般）

（令和5年10月18日付 病害虫防除技術情報（第4号）参照）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 性フェロモントラップによる誘殺数は、10月上旬に5地点のうち5地点で平年より多かったが、中旬以降は平年よりやや多が2地点、平年並が3地点で推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、発生に助長的であるが、今後気温の低下にともない露地での発生は減少してくる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(11) シロイチモジヨトウ（冬春野菜全般）

(令和5年10月18日付 病害虫防除技術情報(第4号)参照)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 性フェロモントラップによる誘殺数は、10月上旬に5地点のうち5地点で平年より多かったが、中旬以降平年並で推移している(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、発生に助長的であるが、今後気温の低下にともない露地での発生は減少してくる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

【病害虫発生予察情報・各種調査データ】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病害虫対策 > 愛媛県病害虫防除所

ホームページアドレスは <http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyuboj/index.html>

【農薬使用時の注意】

◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。

◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。

◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。

◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。

◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。

◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。

◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。

◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。